

有川節夫

Interviewer

進研アドBetween編集長
長田雅子

次代を若者に託すために
自身の優秀さに気づかせる
これを教育の原点にしたい

震災からの復興が社会全体の課題となる中で、
将来を担う人材の育成が強く求められている。
創立100周年を迎えた九州大学の有川節夫
総長に、九州大学は今後どのような役割を果
たそうと考えているのか、展望を聞いた。

専攻分野の周辺の 俯瞰を促す教養教育

長田 創立100周年おめでとうございます。節目の年を迎え、これからの100年に向けた展望についてお聞かせください。

有川総長(以下有川) 学内関係者を対象に開催した九大百年開学式の際に、私は「九大百年、躍進百大」というメッセージを發しました。これは、本学がどの分野においても世界のトップ100大学に加わるべく、これからの100年の発展を築いていきたい、という意気込みを表した言葉です。また、大学には、優れた人材を社会に送り出す役割があります。世界を舞台に活躍し、人類の未来を切り拓くリーダーを育成することが使命であると考えています。

この目標の実現と役割を果たすために、本学はこれからの100年、自律的に改革を継続していかなければなりません。その基盤として、永続性のある強靱な改革スキームを確立することが必要です。すべての学内関係者が、このスキームを共通認識として持ち得れば、各部署の改革が絶えず進んでいくでしょう。これを、改革を持続させるためのエンジンにしたいと思っています。

長田 教育の面では、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

有川 全学教育、教養教育を大学における最も重要な事業と位置付けています。そこで、幅広い教養を養う体制を充実させるために、基幹教育院*を開設する予定です。専攻する内容だけを深く掘り下げていくと、視野が狭くなる場合があります。しかし、

さまざまな教養を身に付け視野を広く持ち、周辺を俯瞰することにより、自分の専攻する内容の位置付けと意義が確認できます。そのためにも、基幹教育院の開設によって、教養教育と専門教育の一貫性のあるカリキュラムの構築を進めていきます。

九州帝国大学初代総長の山川健次郎は、「修養が広くなれば完全な士と云ふ可からず」と訓示を行いました。そもそも大学は深く学ぶ場所ではありますが、総合大学として「広く学ぶべし」ということを、学生にはさらに自覚してもらいたいと思います。

自分の能力を信じないと 若者は伸びない

長田 教養教育を基盤としつつ、具体的にどのような方針で教育を行っていかうとお考えですか。

有川 大学の主役は学生です。次代を託す若者にどう向き合い、何をすべきか。これは教育者としても、年長者としても、きちんと取り組むべき課題であると思います。

学生には、「自分は優秀である」と気づかせる教育を行いたいと考えています。本来、若者は極めて高い能力を持っています。しかし、入試などを通して、自分の能力に見切りをつける学生もいます。反対に自分には高い能力があると自覚している学生は、能動的かつ積極的に学んでいきます。

我々は、受動的な学習スタイルから能動的な学習スタイルに切り替えられるように、学生が気づきかけを与えなければなりません。私の経験から言っても、「自分は優秀である」と気づいた学生は、例外なくその力を

伸ばしています。ですから、本学の教員には、「若者の無限の可能性と能力を信じて教育を行ってほしい」というメッセージを伝えています。

知識基盤社会と言われる現代ですが、大学時代に学んだ知識が役に立たなくなる知識の半減期は短くなっています。しかし、広く深く学んだ経験と主体的な学びへの姿勢は、その後も生かされるはずで

長田 大学のグローバル化については、どうお考えですか。

有川 アジア、そして世界に開かれた知の拠点である本学にとって、教育の国際化は重要です。まずは現在約1900人の留学生の数を増やし、2020年には学部と大学院を合わせて3900人にすることが目標です。また、2020年をめぐりに国際教養学部の設置を構想しています。

アジアやアフリカ諸国の教育機関との連携推進も目標の一つです。例えば、2011年度から「日韓海峡圏カレッジ」というプログラムをスタートさせました。韓国の釜山大学校との交流を通し、次世代のアジアのリーダーとなる人材を育成したいという意図があります。また、日本・エジプト両政府の協力によるE-JUST(エジプト日本科学技術大学)新設プロジェクトには、日本国内12大学で構成される国内支援大学の総括幹事校として参画しています。

一方、国際的に見ると、高い倫理観と意識を持った市民の育成は難しいことだと言われています。しかし、東日本大震災において、日本人の行動やモラルは世界から称賛されました。私たちは日本人の倫理観や意識の高さ、文化をもっと誇ってよいと思



ありかわ・せつお 1941年生まれ。九州大学大学院理学研究科数学専攻修士課程修了。同大学理学部助手、京都大学数理解析研究所助手などを経て、1985年に九州大学理学部附属基礎情報学施設教授、同大学大型計算機センター長、附属図書館長、総長特別補佐、理事・副学長などを歴任し、2008年10月より現職。

います。そのことを意識して、これからの復旧・復興に取り組むべきだと思いますし、国際的な教育も行っていくべきでしょう。

成長を実感できる 新キャンパスづくり

長田 教育と研究は大学にとって切り離せないものだと思います。研究面で果たす役割についても考えをお聞かせください。

有川 現在、エネルギー問題に大きな関心が寄せられています。解決には、総合的かつ多角的な見識が必要ですが、本学はこの問題に正面から取り組める大学であると自負しています。

本学は文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム」に選定されたカーボンニュートラル・エネルギー国際研究所を持ち、水素の製造・貯蔵・利用、二酸化炭素の回収・貯留等の研究に取り組んでいます。化石燃料を有効かつクリーンに使う方法や再生可能エネルギーの研究にも取り組んでいます。例えば、弱い風でも発電できる風レンズ風車は、本学で

研究を進めてきたものですし、地熱エネルギーやバイオマスなど、風力発電以外にも再生可能なエネルギー資源の研究を行っています。

原子力エネルギーの研究にも総合的に取り組む必要があります。福島第一原子力発電所の事故では、事故対応のプロセスにも問題が露呈したことから、社会科学の面からの準備も必要でしょう。さらに、近隣諸国の原子力発電も視野に入れなくてはならない。有事の際にしっかりと専門知識を持ち、安全な方向に導ける専門家を育ててはいけません。

長田 伊都新キャンパスへの移転が進んでいますが、交通の便が悪くなるのではないのでしょうか。

有川 それはどこを中心に考えるかによるでしょう。ただし、周辺から孤立して教育活動を行うことはできないので、大学周辺を含めた地域の充実を考えていかなければなりません。それには時間がかかるかもしれませんが、社会の成長を感じづらくなった時代に、未来に向けての成長を実感できるキャンパスにしたい。学生には充実していくキャンパスで学び、ともに成長してほしいと考えています。

*全学教育・教養教育に携わる教員が所属する組織